
これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメール略して銀プレです

さんすべりあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメール略して銀プレです

【Nコード】

N2046Z

【作者名】

さんすべりあ

【あらすじ】

警察官になって、はや2年。毎日あいさつしてくれる女の子に告ったある日、事件現場で殉職しました。 やっぱりあれは死亡フラグだったのか。そうだな、オレが幸せなんてヘンだもんな。二階級特進バンザイ（泣）。 生まれ変わった先は、いわゆる剣と魔法のファンタジー世界でした。 ホームズ好きの妖精にとり憑かれたつ、めざせ、魔法警官。いや、その前に成長しなくちゃだけど。

プロローグ（前書き）

気楽に書こうテンプレシリーズ第二弾。

もっとも、第一弾とはぜんぜんつながりません。

独立して読めます。

よろしくお願いします。

ブローグ

通勤通学の皆さんが、駅や学校に向かって行き交っている。

そんな中、オレは一日おきに交番の前に立つ。市民を見守るのは、警察官として大切な仕事である。

「見守るっていうか、見てんのは冬ちゃんだよなー？」

先輩がからかうが、オレは固い表情を崩さない。崩れない。崩せない！

手には汗がダラダラ。

緊張で顔は硬直。じつぢよく

……すがすがしい朝日の中、自分が一番不審人物なのは自覚している。

「おう、来たぞ」

先輩が、ドンと背中を押した。よろけるオレに代わり、見張りを勤め始める。

「おはようございます」

いつもと同じ笑顔が目の前にあった。

江上冬さん。えがみ天然ぽやぽやの、騙だまされやすそうな1年生。背が小さいので一見中学生だが、彼女の制服は南東北高校、通称西ナシ高のもの。

しかもオレは平日毎日見ているので、お子様と間違えるはずもない。

ん？ なんで毎日？ 非番があるだろうって？

甘いな。オレは休みでも朝来ているのだ。彼女の挨拶あいさつにはそれだ

けの価値がある！

「お、おはようございます。あ、あの」

ナゼか敬語。しかも返事が上ずってしまふ。

「お、お話が……。ち、ちよつとこちらに来てもらえますか」

「え。私、警察に取り調べられるような事しました？」

本人は不思議そうに目を丸くしたただだったが、周りがざわめいた。（えー何なに）（万引き？）（スマホで撮つとくか）など、予想外に不穏な方向へ進んでいく。

まずい。このままでは、オレが冬さんを無実の罪に陥れてしまふ！

オレは覚悟を決めた。

「ちちち違ふんです。話というのは、つまりですね、もももしよければ本官と付き合つて下さい！」

今度は、おおつとどよめきが上がった。

よし、冤罪回避。

それはいいのだが、告白したのは初めてだ（された事はナイ）。頭に血が上つて、立ちくらみのようにクラクラふらふらしてくる。もついい。言うだけ言つた。我が生涯に一片の悔いナシ。だから、断るなら早くして欲しい。

さすがにここでブツ倒れるのは恥ずかしいので踏ん張っていると、冬さんは困った笑顔になって首をかしげた。

ああ、やっぱりな。

町内おばちゃんたちの噂では彼氏はいないってハナシだったが、

そう上手くいくわけがない。いつでも来い、と覚悟はするが、オレの肩はガツクリ落ちていた。

頼むから、優しく断ってくれ。キモイとか言うのなしで。
本気でへこむから。

「あ。違うんです。お巡りさんはいい人だと思います。挨拶してくれますし。ただわたし、よく知らないから、あの、お友達からいいですか……？」

遠慮がちに訊ねる姿は、地味だが可愛い！

「はい！ では自己紹介をさせていただきますっ。本官は西岡勇太郎といい、現在20歳。貯金ナシ彼女ナシの不甲斐ない男ですが、剣道は全国大会で入賞の腕前です！ ぜひ冬さんを守らせて欲しいのでありますっ！」

あ、また敬語になってしまった。

しかもあんまり嬉しかったので、彼女がいつも乗る電車が行ってしまったのに気付かなかった。

それでも冬さんは怒らずに慰めてくれた。

少しだけ話をして、携帯の番号とアドレスを教えてくれた。

なんていい子だ。

オレは幸せな気持ちで業務を始め

昼に発生した強盗事件で、犯人に撃たれて死んだ。

やっぱり今朝のは死亡フラグだったのか。そうだな、オレが幸
せなんてヘンだもんな。二階級特進バンザイ。しくしく。

さいごに一言。

「なんじゃこりゃああっ (by 太陽にほえろ。実物見たことな
いけど)」

そんで。
転生した。

プロローグ（後書き）

……タイトルの『銀のプレートメール』にたどり着くまで長いかもしれません。

できれば、気長にお付き合いいただけると嬉しいです。

1 乳幼児。

そんで。
転生した。

なんか、あの世で閻魔大王えんまに会った気がする。
あと、知らないオマケをそのままくつつけられたのは覚えてる。
ラック値の欠けているオレを憐れんで便宜べんぎを図ってくれるなら、
オマケじゃなく冬さんをギブ。

……冬さん。もう会えないんだ。
生まれた直後はそれが悲しくて大泣きした。しばらくたってから
も男泣きに泣いた。
だって始めて女の子と付き合えそうだったのに。まあ、オトモダ
チからだっただけ。

恋愛理由で泣く赤ん坊ってどんなだよ、と自分でも思うが。
悲しかったんだから仕方がない。

それはともかく、生まれ変わっても現代日本の基礎知識は残って
いた。

有効そうなところで、「海外派遣編：井戸の作り方」や「サバイ
バル」「野草・薬草」。
警察の試験に落ちたら、自衛隊に応募しようと思っていたので読
んでいた。

これをチートというのだろう。
剣と魔法のファンタジーな世界でも通用するはず！

自分で歩けるまで、死なないでいたらね。

それが目の前の問題。

実は、恋人未満の冬ちゃんと死に分かれたのを泣いている場合じゃないのだ。

オレは生まれてこのかた、満腹するまでミルクをもらった事がない。

母の乳の出がよろしくないのだ。中世ヨーロッパ風の社会では農民の地位がめっちゃめっちゃ低く、そして父親と母親は完璧な農民デス。

という事で、命の危機。まったり寝てられないオレは、驚異的なハイハイを身につけた。

「きやー、マグナスったら何してるの」

姉が叫んでいる。ちっ、見つかったか。

洗濯物を放り出して追いかけてくる姉から逃れるべく、方向転換。
藪やぶに隠れて匍匐ほふくぜんしん前進なんてしてる余裕はもうない。直線で、目標物

【たんぽぽ】！

花をぱくつとやったところで、姉に捕まった。

「食べちゃ駄目っ」

ぺしっと、犬が食べちゃダメな物を食べた時のようにはたかれた。しかし飲み込んで、次はヨモギに手を伸ばす。むしって口に入れようとすると、姉が手を押さえて、拮抗きっこう。にらみ合う。

「あー（少量なら、赤ちゃんでも平気だと思うけど）」

「あー、じゃないの！」

「だー（本当はてんぷらにすると美味い^{うまい}んだけどさ）」

「だー、でもなくて！」

オレは姉の腕の中で、ひょいと態勢を入れ替えた。

柔らかい体は、丸くなるだけで簡単に腕の下へ落ちる。姉はびっくりして手を離れたので、ヨモギを飲む。あとはクレソンだな。

川近くまで、高速ハイハイ。

歯がないので前二つは食べにくかったが、これは歯茎ですり潰せた。うん、けっこう平気に食える。

座りこんでもしやもしややっていと、姉が膝を抱えて泣きだした。
「……ごめんね。お腹すいてるのよね。うちが貧乏だから。ごめんね」

「……」

オレはクレソンを摘むと、姉の前に這って行って差し出した。腹が減ると、大人でも泣きたくなるよな。

「あー（サラダに乗ってるヤツだから）」

鼻をすすりながら顔をあげた姉は、ぱくりと食べてくれた。

2 幼児。

親は朝早くから起きて畑の世話をしているので、子供のオレを育ててくれたのは兄と姉である。うーん、お百姓さんってエライ……というか、たいへんだな。

農業用機械の原理も覚えてくれば良かったと、後悔。

「……」

よし、後悔終了。

できる事からガンバロウ、って標語もあつた気もするし。まずは毎朝飲み水を汲みに行く姉のため、井戸にポンプを取りつけよう。水汲みは重労働なのだ。

満一歳にしてハイハイを卒業、先日から二足歩行をはじめたオレは、よちよちと井戸に近寄って行った。

「あらマグナス。ケイトはここじゃないわよ」

「あー（知ってる。川にクレソンを取りに行った）」

オレが異常にクレソンに執着するので、このごろ姉は自発的にクレソンを摘みに行ってくれる。塩だけで簡単おひたしになるので、空腹な家族にもギリギリ好評のラインだ。

それにしても、なんでここの人たちって野草食べるの嫌がるのかな？

おかずが一品増えたら嬉しくない？

それはともかく、じーっと井戸を見ていたら、広場が騒がしくなった。

「何があつたんだい？」

水を汲んでいたおばさんが、ざわめきの方へ大声をかける。

「イノシシが出たんだってさ。男衆が倒したってよ。今日は焼き肉よーっ」

焼き肉！！

オレは立ち上がると、一生懸命広場へ走った。

まだ頭がでかすぎてバランスがうまく取れず、一歩ごと右へ左へ揺れるのは大目に見て欲しい。

「だー（にーちゃん）」

近付いて行くと、先に来ていた隣のおばさんが抱き上げてくれた。イノシシ獲ったどーな浮かれ騒ぎだけでなく、もっと切羽つまつた動きもある。

「ヨシユアがケガをした！ 森の治療師を呼んで来い！」

「木地師が森でケガなんて、他に獣が出たのか？」

「いや、元から体調が悪かったらしい。手負いのイノシシにやられただけだ」

ほつとした空気と緊張が交錯し、慌ただしく何人かが走っていく。

「こんなところに来て、危ないじゃない。踏まれちまうよ」

「あー（ありがとう）」

オレの気持ち伝わったのか、おばさんはぐりぐりと頭を撫でてくれた。どういたしまして、と言いながら兄へ近寄る。

「ジョージ、マグナスがおめでとುತ್ತてさ」

「おう。見ろよ、マグナス。兄ちゃんが獲ってきた、久々の焼き肉だぞ」

兄ちゃんサイコー。

もちろん肉は好きだ！

きらきら目を輝かせたオレは、盛大なよだれをたらして集まっていた人々に大笑いされた。

「おまえん家の弟、ホント食い意地が張ってるよな。草喰うんだろ？」

「うー（クレソンをばかにするな。整腸作用だってあるんだぞ）！」

「ジョージも狩りに参加したし、ロバートの家のはいいところを切り分けてやれ」

両手を振り回すオレの抗議に笑った村長は、肉を解体しているおじさんに声をかけてくれた。

村長、なんてイイ人なんだ。

いつか恩返しさせていただきます！

オレがきゃっきゃとはしゃいだので、村人はまた大笑いした。

夕食にはもちろん肉が出た。

もちろん付け合わせのクレソンも。

「マグナスのおかげで、いいお肉がもらえて良かったわねえ」

「そうだけどさ。母さん達、そもそもオレが狩りに参加してたからだって、覚えてる？」

「お兄ちゃんって罔？」
おとじ

「それはハル。今年のオレは弓使いだ」

「ほう。当たったのか？」

「もちろん」

珍しく食卓が賑やかだった。

まだ齒のないオレは一かけらをしゃぶるだけだったが、充分に楽しかった。

保存分の肉にハーブと塩をぬって、家族を呆れさせたくらい楽しかった。

肉に浮かれ過ぎてポンプをすっかり忘れていたのは、ベッドに入ってから思い出した。

3 マグナス最初の事件簿1（一歳半）

木地師のヨシユアがケガをしたと聞いたので、オレは見に行つた。今日も頭が大きくて、歩くたびによちよちと左右に揺れる。ああ情けない。早く人間になりたーい。

「おや、お見舞いに来てくれたのかい」

ヨシユアの母親が、ドアを開けようと背伸びしていたオレに気付いて中に入れてくれた。

「あー（大丈夫か？ 具合はどうだ？）」

兄と同じ年のヨシユアは、床に座りこんだオレを抱え上げてベッドの上に座らせた。

「いてて……。お前、ホントおもしれーなー。うちのアリアなんてお前より半年早く生まれてんのに家の中這うのが精いっぱいだ」

「むー（それが普通だ。それより、ケガは？）」

答えはなく、頭を撫でられた。

こいつは姉と違って、こっちの言いたい事を分かってくれない。仕方ないので、足からはじまって肩までぺしぺし叩いてやった。

ヨシユアは太腿ふとももと腹のところで思い切り顔をしかめた。

ケガはそこか。

シーツを剥いたら、シャツやズボンにまで血がにじんでいた。

特に太腿が問題。うわ、そこ動脈の近くだ。あぶねー。一歩間違つたら、出血多量であの世行きた。

「……？」

オレは腹側の、血と共ににじんでいた臍うみに鼻を近づけた。

傷は小さいが、スゴイ臭いだった。

太腿はまだ膿んでないのに。

たった一日でこんなに酷ひどくなるはずがない

*

「……」

オレは薬になる草を探して村の囲いの外へ出た。

目当ての白い花はすぐ近くに咲いていたが、不幸にして背が届かない。まったく、全然、背伸びとかジャンプとかも無理。論外。

なので、オレは今のオレにできる手っ取り早い方法をとってみた。
つまり。

号泣。

びええええ

っと泣く。肺活量限界まで、泣

き叫ぶ。

やがて、声を聞きつけた姉が走ってきた。

「マグナス！」

「うー（ごめんな姉ちゃん）」

「……」

けろりと泣きやんだオレは、木の幹にしがみついて叩いた。

「……登りたいのね？」

うなずく。

姉は、あきらめの境地で枝に乗せてくれた。幸い体重が軽いので、枝の先まで行ってもしなる程度だ。オレは一塊りになって咲いている花を採り、姉の肩に降りた。

「また食べるの？」

首を振る。

「あら珍しい。じゃあ、どうするの？」

「あー」と、オレは肩車のまま家を指さした。

走ろうとして、転んだ。

この使いにくい体、どうにかならないかな。

普通のこどもなら大泣きするところを、オレは腹をたてつつ起きてぺちぺち鍋を叩く。

もはや一歳児とも思えぬ奇行に慣れた姉は、鍋に水を入れて暖炉の火を起こしてくれた。

「やっぱり食べるんじゃない」

「うー」と首を振る。その間も、瓶をとってきて姉に渡す。

「……洗うのね？」

ため息をつかれた。

気にするなつて。物分かりのいい姉を持って、オレは幸せだ。

4 マグナス最初の事件簿2（一歳半）

助手を最大限に活用して、瓶を熱湯消毒し、採ってきた花をつつこんだ。家にあったミントも。

その上で、瓶に炭酸水を注ぐ。

本当はアルコールと蜂蜜も入れたかったが、高いので無理。

ちなみに炭酸水は、山のふもとまで行くと汲める天然物である。

温かかったら炭酸温泉になれるのに、残念ながら冷たくて入れない。胃腸病に効くので、どこの家でも汲み置きがある。

「食べるんじゃないで、飲むの？」

「ぶー（よっぽどオレって食いしん坊のイメージ？）」

オレは一度頷き、それから首を振った。ああ、めんどくさい。明日から発声練習でもしようかな。

今からでも普通にしゃべれると思うけど、家族や村人に慣れてもらわないといけないし。

「あー（とりあえず、片付けて）」

瓶詰の白い花 アンゼリカという にフタをし、オレは姉を見上げて棚を指さした。

「はいはい」

心得た姉は、埃のない場所にかたづけしてくれた。

「で？」

「う（終わり。ありがとう）」

ぺこりと一礼すると、腰に両手をあてて偉そうだった姉が笑い出した。一歳児が手を揃えておじぎするのが、彼女のツボらしい。

……アンゼリカの薬ができあがるのは、早くて明日だ。

暇ができて、オレは考える。

こうして姉の家事を邪魔するのは良くない……あ。そうだよ、だから井戸にポンプつけようと思ったんだ。忘れてた。

オレは姉のスカートを引き、外に出た。地面に図面を書くと、姉が上からのぞき込む。

「なんの絵？」

オレは井戸を指さした。

それから図面の取っ手部分を示し、ゼスチャーしてみる。図面の口から水が出るのも描き加える。

「……水が、出るの？」

さすが姉ちゃん、これだけでよく分かったな！

オレは拍手したが、姉の顔色は悪かった。

真剣に肩に手を置かれた。なに、一歳児にマジ説教ですか？

「マグナス、みんなで使う物にいたずらしちゃダメよ。いいえ、いたずらどころじゃないわ。そんなの見つかったら、教会になんて言われるか。異端者だと思われたら殺されるのよ。いい？ 絶対にこんなの描いちゃダメ」

……え？ ええっ？

なにそれ科学ダメって事？ 魔女狩り逆バージョン？

ぎゃー、いやだー。まだ子供だし、ろくな抵抗もできないぞ。

怖くなったオレは、カクカクと何度もうなずいた。

姉の手伝いは、他の事でしよう。それに考えたら、真空状態できるだけの技術がオレに無かったしな。

で、次の日。

「こんにちはー」

「まあ、今度はケイトかい。ヨシユアのために悪いねえ」

「いいえ、昨日はうちのチビが勝手に邪魔しちゃって、こっちこそごめんさない。それで、これ、差し入れてもいいかしら」

姉は、アンゼリカの瓶詰を差し出した。

「なんだい？」

「『魔女の霊薬』っていうんですって。魔を退^{しりぞ}けて、病気を治すお薬」

仰々（ぎょうぎょう）しい名前に、おばさんが目を丸くした。

「なんだってそんな物。治療師でさえくれなかったのに」

「マグナスが」

おばさんの視線が、スカートの影になっていたオレへと降^{くだ}ってきた。

微妙な沈黙。

「大丈夫。塗り薬とかじゃなく、飲み物なんですって。あたしも飲んでみたけど、美味しかったわ」

「ああ！ 飲み物が、なるほどね！」

一気に明るくなったおばさんは、木製コップを持って来てくれた。もちろんヨシユア作だ。

……疑われたり怖がられなかったのはいいんだけど、ナニこの落差。なんでオレ、食糧ネタだと大笑いされんだ？

5 マグナス最初の事件簿3（一歳半）

ヨシユアは、まだベッドで寝ていた。
昨日より膿の臭いが強くなっている。

オレはベッドに、よじよじとよじ登った。おばさんがヨシユアが身を起こすのを手伝い、姉がアンゼリカ抽出液を入れたコップを差し出す。

止血・鎮痛・いたみどめ はれをなおす抗炎症などの効果があるので、飲まないよりマシだ。

これでオレのチート能力が物質生成なら、いくらでも即効の現代的医薬品が作れるのだが、あいにくそんな気配はどこにもない。

これでガマンしてもらおう。

ちなみにナゼこんな知識があるのかといえ、警察で勉強させられたオマケである。

あれはあれで面白かった。

一クラス分の警官が集められて勉強するのだが、基本、一蓮托生。一人落ちたら、みな追試。なので嫌でも結束する。その必要もないのに、全員でアタマを坊主に剃り合って笑い合った。

オトコの友情、昭和篇じゃないよ？

はーとうおーみんな職業系ひゅーまんどらま。

というわけで、この世界でだったら暗黒社会で暗躍できるくらいに麻薬覚醒剤その他を知ってる。

コカインはもとと植物の抽出物で、現地人の滋養強壮のお茶だった。クスリと薬は紙一重。そんなところから、植物方向も暗記している。

自分で言うのもなんだが、オレが警官志向の人間でよかったと思うよ。

それはさておき、ここまで膿がひどいとちょっとなー。

この村だと、酒場に行っただって高濃度のアルコールなんて無いし、どうするか。

シーツを剥いで座りこんだオレは、シャツをめくって腹の傷の前で腕組みした。

腕組みする一歳児って……いや、今はそんな事いつてる場合じゃないのだ。

始めて傷を見た姉は小さく悲鳴を上げ、おばさんは沈痛にうつむいている。村人の死因はだいたい病気かケガで、この手の傷が元で命を落とすのを、大人は皆知っている。

「あー」

「マグナス？」

「いー、うー。えー、びー、しー、でー」

発声練習をしたオレは、子供特有の甲高い声にびっくりした。うわーウィーン少年合唱団。この世界にないけど。

「あーあーあー」

「マグナス、ちょっと」

姉が慌ててオレを抱えて出ようとするが、オレはびしりと片手を立ててストップをかけた。もはや一歳児の域を越えているが、だって放っておいてヨシユアが死ぬの嫌だし。

つか、姉、今すぐ椅子に座って寝てくれないかな。
メガネな少年探偵・湖南みたいに副音声でお送りできるのに。

「……」「……」「あーう？」

純粹に幼児なアリア以外の無言が落ちた。

実はちよつと期待したのだが、姉が寝てくれなかったので、オレはさつさと諦めた。

「ワタシは紙です。この子の口を借りて騙かたりましょう」

「な、なに突然」

ずさささつと、姉とおばさんは抱き合つて壁際に張りついた。
ヨシユアも冷や汗をダラダラ流している。

いいよ別に信じなくても。
建前が欲しかっただけだし。

「傷は治セマス。あなたが正直に告白するなら。太腿ふとももの傷はイノシシ退治でできたものデスが、この腹のは違いマスね」

おばさんが息をのんだ。知らなかったんですか、ふーん、ヨシユアは家族にも隠してた、と。

「いつ、どこで、誰にやられマシたか」

「……先週の土曜日に、森で。誰かは分からない、いえ、分かりません」

敬語になるなんて、信じたの？ オレの紙サマ。

それはさておき、土曜日は安息日。教会からの通達で、仕事をしちゃいけない日になっている。

隠すんだから、ヨシユアは森で木工の仕事してたんだな。

「大丈夫、言いマセン」

逆魔女狩りしてる教会に、禁を破ったなんて知られたら怖すぎる。

それに、ヨシユアを殺しかけた犯人ってうちの兄ジョージだよ！！

何してんだ兄ちゃん！

オレは腐っても元警官だ。焼き肉の誘惑があっても肉親でも、涙をのんで告発するぞ。

小さな傷は、膿んで崩れて形が分からないが、広く斬られていないのだけは確かだ。残るは、刺すか、突くか　　射るか。

兄は森で弓の練習してたし。

慣れてる他の弓使いがうっかりするとも思えない。

「答えてくれて、ありがとう。おかげで犯人が分かりマシタ。ジョージです。後で謝罪に寄こしますが、示談で済ませてもらえると思います」

言った瞬間。

ぽんっ、と煙が湧いた。

『事件解決おめでとうございます！　お久しぶりです、マスター！』

帽子のかわりに小さなティアラ。ドレスの上にインヴァネスコー
トを羽織り、右手にパイプ。

金キラの髪を頭の横で二つに結び。

きわめつけは背中の中。

もはや何からツツコンでいいのかわからない、手のひらサイズの
妖精がオレの鼻先に現れた。

ホームズ好きのフェアリープリンセス。

これが閻魔大王が、前の世界から引き続き（特別に？　面白がつ
て？）くつつけてくれたオマケである。

あぜんとする姉たち。

だろうな。オレだって死ぬ前の世界でコレに出て来られた時には、
自分の正気を疑った。

『きゃあ。マスターったら、かわいいー。こんな小さくなっちゃ
ってー』

『可愛いと言っな。それより、解決したからな。願いは、ヨシユ
アの傷を治すこと』

『うわーん。一年以上会えなかったのに、マスターが冷たい』
『冷たいのは室内からの視線！　さっさとする！』

はい、と頬を膨らませた妖精は、ぱちんと指を鳴らした。

音と共に、ようせい本人と傷が消えた。

残されたのは、呆然とする姉とおばさん、全身すり傷一つなくなつたヨシユア。

オレはといえば、知識以外のチートがこんなだつたのを嘆くだけ。

……あ、紙サマの演技わすれてた。

ま、いいか。

そんなの気にしてる人、誰もいないしな。

6 ホームズ好きの妖精って一体……。

思い出したくもないが、妖精との出会いは死ぬ前の現代ニッポン、警官として初手柄の時だった。

「三島東里^{みしまとうり}、22時18分、強盗の現行犯で逮捕する」

数カ月続いた連続強盗の犯人を、ぎりぎり間に合って捕まえた。

犯人も犯行も予想できてはいたが、まだ新米で、自分の考えに自信がなかった頃だ。

あまりに自信がなさすぎて、上司どころか面倒を見てくれる先輩にすら言えなかった。トイレに行くふりでこそっと抜けて、一人で行ったら、本当に出くわしてしまったという間抜けっぷり。

（うわーどうしょ。おーこーらーれーるー）

何事もなかったら「長かったな」「下痢です」で済むが、これは。

なので、犯人は少し驚いてかかって来たが、オレはそれ以上に驚いていた。

条件反射で取り押さえたのはいいものの、頭の中はマッシロ。

言うべき事や手順もすべて忘れた。

被害店舗で、粘着テープで巻かれた従業員と、とりあえず手錠だけはかけた犯人を前に、ただひたすらマニュアルを思い出そうと頑張っていたんだから、我ながらどうしようもない。

「……あんた一人だよな。こついうの、許可されてねーよな。無効

「じゃね？」

「そんなだったので、犯人にまで揺さぶりをかけられる始末。」

「え、いや、現行犯だから大丈夫。そのはず。他の、今までの分は、取り調べで分かるはずだし」

「汗だくビクビクで拳動不審に言う姿は、犯人より怪しかったと思う。」

「他のなんて知らねーな。つか、三島ってダレ」

「お前だろっ！ 言い逃れしようとしても、ムダだ。オレが思うに……」

「自信のないまま手口や潜伏方法などを説明していたのも、思い直すと恥ずかしい。二時間サスペンスじゃないんだから、ありえない。」

「オレは船越 一郎か？」

「ここは東尋坊とうじんぼうか！？」（海に突き出た“ざっぱーん”な崖）
「勝手に突っ走った事もふくめ、イレギュラーばかりである。」

「そんな赤っ恥な説明を終えた時だった。」

「ぼんっ、と妖精が目の前に湧いて出た。」

「きゃー本物ホンモノ！ 名探偵見ーつけたっ」

「……………」

「……………」

「その時の犯人といったら、表現しようのないキョトン顔だった。」

いい歳した男のするもんじゃない。
情をしてたけど。

もちろんオレも同じ表

だが、ある意味当然だと思う。

だって、手のひらサイズの女の子（羽つき）ってだけでもおかしいのに、その服装がドレスにインヴァネスコート。片手にパイプ（しかも空^{から}）。刻みタバコは入っていない。

ホームズファンの勘違いコスプレ？

それとも妖精的には正しいのか？？

それ以前に、妖精っているんだな……。まずそこからビックリだよ。

『ステキ！　ねえ貴方^{あなた}、私のマスターに任命してあげる。貴方が一つ事件を解決するたびに、願いを一つ叶えてあげるの。嬉しいでしょ？　どう、何か欲しい物とかある？　私ができる範囲で言うてみ

て』
「消えろ」

白昼夢を見ているヒマはない。

犯人をしょつ引かなければならないのだ。

オレは目をつぶって頭を振る。次に目を開けた時には、妖精は消えていた。

「ふつ。この状況で夢みるなんて、オレも余裕だな」
強がって棒読みで笑うと、

「……………夢、か？」
ぼそりと犯人が訊いた。

抵抗する気をなくした犯人と帰ったオレは、署内の全員に本気で怒られ始末書を書かされた。

職務規定に反したのだから、仕方がない。
それは反省する。諦める。諦められる。

諦められないのは、あのとき妖精に「消えろ」と「願って」しまった事だ。

願いは叶えられ、契約は成った。

オレは不本意ながら、完璧にとり憑かれてしまった。

死んでからも契約は消えず。
そして今に至る。

ところで、一言いいか？

オレ、警官であって、探偵じゃないんだけど。

どうしてあのフェアリープリンスは、根本的なところでいい加減なんだろう。

7 v s 森の治療師 1 (一歳半) (前書き)

読んでくださっている方、ありがとうございます！
前作にくらべアクセス数、お気に入り数が増えて驚愕。
感謝です！

7 v s ・森の治療師 1（一歳半）

兄ジョージは、自分の弓練習がヨシユアにケガをさせ、イノシシに引っかけられる原因になったと知って真っ青になった。

しかもケガをさせたのが安息日。

「安息日とは、かつて魔人の奴隷となっていたヒトが勇者に率いられ、6日間の反乱の末に勝利した史事に由来するのじゃ。勝利の7日目を、労働から解放された聖なる日と定めて祝福する」

ケガの根本原因が明らかになったため、村長が説教をしている。

「あゝ（どこの聖書バナシだよ。どんだけ伝言ゲームしたら、こんなに曲がるんだよ）」

ツツコミを入れたいが、ここで紙サマを演^やると後が面倒なので、幼児語続行中だ。

「今は教会の戒律も緩^{ゆる}くなり、労働をしてはいけなさとされているだけになったが、本来は家事すら行っではならない日だった。そんな日に仕事をし、弓の練習をするなど言語道断」

うーわー。今で緩いの？

魔女狩りされると脅された身では、信じられない。

オレは聞いているのも嫌になって、広場で聞いている人々の輪から抜けだそうとした。

が、姉に襟首をつかまれて引き戻される。

「うー（はーなーせー）」

「ダメよ。殺されなくなったら、ちゃんと聞いておきなさい。街に行かないと教会がなくて、村でこういう常識を教えてもらえる機会はないんだから」

「むー（そんな常識いやだー）」

ジタバタしていたら、いつの間にか説教がやんでいた。

あ。そんなにうるさかった？

逃亡はやめないが、他人の迷惑になるのはよくない。慌てて黙ったが、原因はオレじゃなかった。

場は緊迫する一方。

細い体を黒の服で包んだ、地面まで伸びた白髪のお婆が、杖をついて広場へと歩いて来ていた。

おとぎ話そのまんま。

あるいは学芸会。

治療師だ、と誰かがささやいたが、言われなくても一目で分かる。

お約束としては、こういうお婆さんにこき使われている可愛い女の子がいるはずなのだが、残念ながら見当たらない。

治療師は広場に集まっている村人を見回した。

「教会が認めた医者や治療師以外に、治療行為にかかわってはならない。お前ら、知っておろす」

しわがれた声も、細められた目も、いかにもヘンクツ。

ついでに老婆の言いたい事を理解して、オレはさっき逃げられな

かったのを悔^くんだ。

「『魔女の霊薬』を作ったのは、お前か」

老婆は姉を見たが、村人の（かわいそうに）という視線が全員オレに向かつていたので、オレの前に立った。

「こつちだと!？」

なんか文句あるか。

「まだ赤子ではないか」

「おー（いえーす）」

すつとぼけて、何も分からない子供らしく、かわいらしい演技で手足を動かしたのだが無意味だった。

「まあ、いい。それが本当ならたいしたもんだ。罰は与えないでおくよ。だからこつちに來な。アタシが引き取って育ててやろう。何といつても、この周辺には他に治療師がないからね。後継ぎが必要なんだ」

ちよつと待て。人の将来を勝手に決めるな。
せめて考える時間をぷりーず。

連れて行こうとした老婆の手をかわし、オレは右へ左へコロコロンと転がった。追いかける老婆。フェイントを織り交ぜて逃げるオレ。

「このっ」

「あー」ころん。

「待てっ」

「うー」ころん。

「待てと言っておるだろうがっ!」

目の前の地面に、雷撃がドツカンと落ちた。待てコラばーちゃん、子供に魔法攻撃するなよ！

「エルドハムにこの人ありと言われたアタシを、本気で怒らせるんじゃないよ。さっさとおいで」

ナニその悪人なセリフ。

人さらいは許さんぞ。被害者が自分なら尚更だ。

「らー！」

オレは見よう見まねで空を指差し、振り下ろした。

ぴりっ

と、雷Lv0・2くらいのが降ってきた。ほとんど静電気。老婆の髪の毛が逆立っただけ。

つつかえねー！

オレは敗色を悟るとすぐに転がった。

予想通り、今までいた場所に雷撃どっかん（再）。

あつちはLv3くらいか。当たっても死なないが、般若な形相で髪の毛逆立ててやられると、かなりコワイ（いや、髪の毛に関してはオレが原因だけ）。

ころん。どっかん。ころん。どっかん。ころん……………

先に息を切らしたのは相手だった。

ふっ、一歳児をあなどるな。

悪役風にニヤリとし、調子に乗ったオレは老婆の足にタックルをかました。

尻もちをついた治療師は杖でオレを殴ろうとしたが、その頃には
ターボ付き匍匐前進で離脱完了。
勝った。

8 vs 森の治療師 2（一歳半）

対戦カード：オレ対治療師は、オレの素早さ勝ちで終わった。

息を切らせた老婆はさておき、周囲では、村の人たちが何やら遠巻きにこつちを見ていた。

「あー（どの辺が問題）？」

ぺたんと地面に座り込んだオレが首をかしげると、

「マグナス！ 魔法なんて教えてないのにどうして。ケイトお前かい」

走ってきた母がオレを抱き上げ、抱きしめた。

「うー（姉ちゃんは関係ない。治療師のばーちゃんがやってたのをマネしただけ）」

姉が通訳すると、村人に微妙な空気が広がった。

忌避ではない。

もう少し複雑で、（うちの村だから仕方ないか）とか（そういうのも有るかもな）とか、そんな雰囲気。

なんですか、実はここ魔法使いの隠れ里ですか。

反対側に首をかしげて母と姉を交互に見ると、二人は揃って村長を振り返った。

ヤギみたいな白ひげの村長はうなずいた。

「ここは中興ちゆうけいの祖ガウリュガウリュディケを助けたアルフの故郷エルドハム。他に比べれば、魔法の素地はある。お前たちも自身で知っておるだ

ろつ。この程度なら問題はない」

説明され太鼓判を押されて、安心が広がった。

話の流れからいって、アルフってのはこの村の出身の大魔道師なんだろう。

彼は（たぶん）王様のガウリュディケを補佐して国をまとめた。で、実は他の村人も多かれ少なかれ魔法の素質がある。

シヨーゲキの事実である。

郷土の誇りじゃないか。そんな凄い人がいたなら、寝物語に聞かせようよ。

そう思ったが、オレ以外にも不思議そうな顔をしている子供もいて、あまり大っぴらに語られるものではないのだと察した。

ふうん、と考えていると、少しばかり忘れかけていた治療師が汚れを払って立ち上がった。

「アルフがなんぼのもんかね。必要なのは大昔の魔道師じゃなく、生きてる治療師じゃないのかね。その治療師が村の将来を心配してやってるってのに！ お前たちは何にも分かってないね！ いいよ、こんな乱暴な子、頼まれても仕込んでやらないよつ。教会にも言つとくから、覚悟しな」

老婆は怒って去りかけたが、姉が立ちふさがった。

「待って下さい。あたしじゃダメですか。マグナスの姉です。この子の言いたい事も分かるし、ヨシユアにあげた霊薬作りも手伝いました」

「うわ、なんでいきなり姉ちゃんが。」

「うー（なりたいたいの？ 手に職つける気？ そうじゃないなら、庇われても困る）」

「庇うわけじゃなくて」

でもきつと、積極的にやりたい仕事じゃないんだろうな。森に引きこもって薬草探しと薬作りって、おしゃべり好きな女の子にはキツイはず。

それにオレは、治療師がいやなわけじゃない。村に必要ならやつてもいい。

ただ、向き不向きってあると思う。オレは治療師になった未来を想像する。

成功例：知識を総動員して、画期的治療法を確立。村を一大医療センターにしちゃう。JINN NN。

成功例別バージョン：過疎地をささえる医療系ヒューマンドラマ。自転車こいで往診しよう。

どっちも悪くないけど、唯一にして最大の問題がある。

実はオレ、器用じゃない。

器用じゃない外科医って、患者にとって悪夢だよな？

失敗例：患者を救えなくてへこんで、立ち直れずにアル中へ。悲惨だ。でもありそう。成功例よりよっぽどありそう。

オレが想像している間村人たちは不安げにざわめいていたが、村長が咳払いをすると静かになった。

「治療師よ、しばらく待つてもらえんかな。その子はまだ一歳じゃ。洗礼すら受けておらん。祝福を受けてから決めても、充分間に合うだろうて」

老婆はオレを見おろした。

ふん、と鼻を鳴らす。

「祝福なら、この子供はすでに持つておる。教会に寄らず祝福を受けていると知られては、ますます厄介じゃな」

「なんだと……」

一度おさまったざわめきが、さっきの倍になって復活した。

「それは……困った。霊眼の治療師が言うのなら事実。これで教会に行ったら、異端を疑われるか」

あれ？ 異端つて、科学じゃないの？

オレがスカートの裾を引っ張ると、姉はしゃがみこんで答えてくれた。

「教会の教え以外のものは、全部異端なのよ。他の神や……妖精も」

「許されるのは精霊や天使くらいだな」

お見通しだと言わんばかりの老婆が追い打ちをかけた。

「うー（……降参）」

がつくり頭を垂れ、それからオレは気がついた。

「おー（ちよつと待て。霊眼の人つて、あちこちにいるもの？ 街の教会にも？）」

「いないね」

姉が通訳し、老婆が不機嫌に答えた。

ひっかからなかったか、と舌打ちが聞こえました。ばーちゃん、

アンタなんて意地悪な。

「よかった、マグナス。気付かれないって事よね？ これで他の子と同じように洗礼を受けられるわ」

ほっとする家族。

……良かったけどさ、「あー」や「うー」だけで通訳できる姉もおかしいって、なんで誰も思わないの？ オレはそっちの方が気になるよ。

まあ、姉は洗礼済みだから、実は霊耳（なんてのがあるかどうか知らないけど）でも問題ないんだろっけどね。

8 vs 森の治療師 2 (一歳半) (後書き)

次回、妖精ふたび。

9 森には死体が落ちている 1 (三歳)

自分の足で歩けるようになって、食材集めがワンランクアップした。

身近な野草ではなく、ちゃんとした山菜が採れるようになったのだ！

というわけで、オレは現在フキノトウとタラの芽、フキを採っている真っ最中である。

うーん、我ながらシブイ。

子供の食うもんじゃない。

でもね、前の二つはてんぷらにすると美味しいし（味付けは塩）、フキは砂糖漬けにするという手がある。

暖炉かまどの低い位置にオレ用の棒を取り付けてもらったので、めんどくさい下処理から揚げ物・煮物まで、姉を煩わづわせずいに作れるのがイイ。

ちなみにどの植物もこっち固有の呼び名があるし、植生もちょっと違う。

オレがフキノトウと呼んでいるのは、アステリデスという名前。もちろん誰も食べない。

でも食えるし。味変わらないし。基本部分が一緒なんだから、問題ナシ。

オレはまた一つ、雪をかぶったフキノトウを摘んだ。

山にはまだ雪がうつすら残っている。

指先が赤くなっているの、息を吹きかけて暖める。

村は相変わらず貧乏で、うちも貧乏である。

謝肉祭で保存肉を使い果たしたので、今の食生活は極貧だ。

魔法の素質があるなら、もっとやりようがあると思うのに、こんな生活に甘んじている。

科学は異端でも、魔法は教会認定である。

だったら好きに使えるはずなのに、村人はあまり使わない。

どうして？ と訊いたら、「怖いから」と姉は答えた。

暴走が、だろうか？

練習して安定させればいいと思うのだが、そうではないらしい。

もう少し大人になったら村長が話すから、と言われた。

でも、オレが静電気な雷撃サンダーを放つのは止められていない。

苦笑されつつ受け入れられている。

よく分からない感覚だ。

「まぐなす。これは？」

ついてきたアリアが、適当な葉をちぎって見せる。

「それは取らずにおいところな。夏になったらラズベリーがなるん

「ただ、葉っぱがないと大きくなれない」

そうだ。春になったら、他の子供たちも連れてベリー摘みを企画しよう。

そのまま食べられるから、山菜と違ってウケるはずだ。

そんな事を考えながら山を歩いていたら。

雪に埋もれた死体があった。

びみゃ っと泣きだしたアリアの手を引いて、オレは一番近い家へと急いだ。

二足歩行はできても、走るのはまだ苦手だ。

「レディ・ワトソン」

『きゃあ、嬉しい。マスターが呼んでくれたー』

ぽんつと現れたのは、頭にティアラを乗せ、ドレスの上にインヴアネスコートを羽織った妖精だ。

オレの肩にちょこんと乗っているの、高い位置で二つに結った金の髪が、歩調にあわせて大きく揺れている。

『あのね、思うんだけどね、もうちょっと頻繁に呼んでくれなきゃ寂しいの。他の妖精なんて人間界に入り浸りで帰ってこなかったりするのに、この頃のマスターって、ぜんぜん頼ってくれないんだも

ん
『

それはアナタが事件つながりの契約をしたからデス。
もう警官じゃない、しかも子供にどーしろってんだ。

思いはしたが、ムダ口は後にする。

「死体があった」

『うんうん。見たわー。クマさんにやられたのとは違ったわねー』

上機嫌なフェアリープリンスは、首をひねって後ろを振り返る。

「解決する前に探偵^{オレ}が死んだらまずいよな？ 近くに人がいないか
探ってくれないか」

『まかせて』

透明な羽を広げて宙へと舞った妖精は、魔法が当たり前の世界で
さえキレイだった。

思わず足を止め見送って、はっとする。

アリアの手を引いて、オレはできるだけ急いで歩き出した。

目的の家は、そう遠くない。

「いませんかー」

オレはその家の扉をドンドン叩いた。

「うるさい子供だねえ」

落ちる雷撃Lv3。

もはやお約束な出迎えをしたのは

治療師の老婆だった。

9 森には死体が落ちている 1 (三歳)(後書き)

お忘れかも知れませんが、アリアは、怪我をしていたヨシユアの妹です。

マグナスより半年早く生まれてますが、歳は一緒に三歳。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2046z/>

これはテンプレですか？ いいえ、銀のプレートメール略して銀プレです

2011年12月16日17時55分発行